

阿含經典の成立

榎本文雄

序

ここで扱うのは、阿含經典、そのうち特に漢訳で伝わる阿含經典の成立に関する諸問題である。

漢訳の阿含經典と言えば、『大正新脩大藏經』の「阿含部」に収められている四阿含が中心となるが、その他に「本縁部」や「經集部」にも阿含經典が含まれている。いまは、紙数の関係もあり、それらの諸經典の中で『中阿含經』と『雜阿含經』の成立を中心にして考察を加えてみたい。これらは、説一切有部系⁽¹⁾と見なされている經典であり、それぞれ、説一切有部系の五アীগマ⁽²⁾の

内 Madhyamāgama, Samyuktāgama にもたさる。なお、『別訳雜阿含經』、『增一阿含經』、『長阿含經』についても問題点は指摘しておく。

一、『中阿含』

漢訳者

『中阿含』には、三八四―三八五年に曇摩難提が訳したものと、三九七―三九八年に僧伽提婆が訳したものと二本が存在したとされ、『增一阿含經』についても同じ経緯が伝えられている。そこで、現存の『中阿含』と『增一阿含』がいずれの訳者の手に成るものかがまず問

題となる。

水野弘元博士は、この問題について研究を進められた末に、現存の『増一阿含』が曇摩難提訳ならば現存の『中阿含』も曇摩難提訳であり、他方、現存の『増一阿含』が僧伽提婆ならば現存の『中阿含』も僧伽提婆訳であるとされ、その決着を今後の研究に委ねられた。⁽³⁾

ところで、僧祐の『出三藏記集』の伝える所による⁽⁴⁾曇摩難提は、兜佉勒(トハリスタン、もしくはクシャーナ国)出身で、『増一阿含』と『中阿含』を暗誦して、それを竺仏念の助けをかりて訳出したという。このように、暗誦していたものである以上、彼の訳出した両経の原本は、同一部派に属し、しかも同一言語で伝承されていた可能性が高い。ところが、現存の漢訳『増一阿含』と『中阿含』に含まれる対応箇所を比較すると、細部で異同が大きく、この現存の両経の原本が同一部派に属し、しかも同一言語で伝承されていたとは考えられない。翻って、この現存の両経が僧伽提婆訳であると仮定すればこれらの異同は説明可能である。僧伽提婆訳の場合、後述するように、『中阿含』の原本は僧伽羅叉が招来もし

くは暗誦していた可能性が濃いのに対し、『増一阿含』の原本は、出所不明であり、したがって『中阿含』の原本とは系統や言語を異にしていた可能性があるからである。この現存の両経間の異同については、水野博士が論じておられるが、それ以外にも音写語の中に原語の相違を示す証拠がある。一例をあげると、Videta 国の首都である Mithila の音写に際し『増一阿含』では「蜜唵羅」⁽⁶⁾とあるのに対し、『中阿含』では「彌薩羅」⁽⁷⁾となる。後述するように、後者では *ph-vh* の変化を被った原語が想定されるが、前者の場合、事情は異なる。したがって、現存の『中阿含』、『増一阿含』は僧伽提婆訳とする方が妥当であろう。

原 語

最近、Freiburg 大学の O. von Hinüber 教授は、『中阿含』の原本が、カロシユティー文字のガンダーリ語伝承を経ていることを示す例を幾つか提示された。⁽⁸⁾ その中で、最も説得力のある例をめぐる von Hinüber 教授の説明は次のようにまとめられよう。

の検討という他の方面からの検証が必要である。ところで、音写語を扱うに際しては、⁽⁹⁾既成音写語の踏襲という点に注意が払われねばならない。その点を考慮して、『中阿含』の中に、既成音写語の踏襲とは考えられない語を検討してみると、ガンダーリ語の特徴を明確に示すものがある。その一例が、先に挙げた「彌薩羅」である。『中阿含』訳出当時の中国語の発音は必ずしも明確でないが、中古音に近いものと仮定すると、⁽¹⁰⁾Misala という原語が想定される。ここでは *ph-vh* というガンダーリ語以外には確認されていない音韻変化が生じている。⁽¹¹⁾ また、初転法輪の際の五比丘の一人、Asvati の音写語は「阿提貝」(大正二、四七三頁a)とあり、Aspati とする原語が想定できる。⁽¹²⁾ *ph-vh* や母音間の *ph* の消失も、ガンダーリ語の特徴であり、とりわけ、前者の変化はそれ以外の言語では確認されていない。

以上の点からして、⁽¹⁴⁾『中阿含』の原本はガンダーリ語で書かれていたか、暗誦されていたと推論できる。⁽¹⁵⁾

Pali の *pabhina* (*pra-vbhid*) に相当する箇所には『中阿含』では「断穢」とある。幸いにも、この箇所にあたる Sanskrit (≡ Skt.) 写本が残されており、そこには *prahina* (*pra-vha*) となっている。⁽¹⁾ *pabhina* が *prahina* (≡ 断) よりも本来の伝承であることは種々の証拠から明らかである。⁽²⁾ *pabhina* ないしその Prakrit (≡ Pkt.) 形の *pabhina* のような形が *prahina* にあたる「断」という訳語が出るためには、カロシユティー文字で書かれた、したがってガンダーリ語による伝承の介在が不可欠である。カロシユティー文字を介してのみ *-ina* が *-ina* に変化しうるからである。

もっとも、カロシユティー文字で書かれたからといって、ガンダーリ語以外の可能性がないわけではな⁽⁹⁾い。また、von Hinüber 教授は、散文部分については一例しか証拠を挙げておられない。しかも、それらの例はすべて普通名詞であり、⁽¹⁰⁾三対応語との相違が音韻変化のみに基づくという保証はない。したがって、音写語

成立地・伝承地

『中阿含』の伝承地について水野博士は、宇井博士や赤沼教授がすでに指摘されているように、中阿含は雜阿含その他一般の正統有部に属するものとは多少異なった有部に属するものであり、恐らくカシユミールの正統有部に対して、ガンダーラあたりの傍系の有部に属していたものである⁽¹⁶⁾。」と述べておられる。しかし、後述するように『雜阿含』は、正統有部というよりは、根本説一切有部系の伝承であり、成立地としてはマトゥラーの可能性が濃い。さらに、これまで正統有部の文献とされていたものに根本説一切有部の影響が大きいことは、L. Schmithausen 教授の論証された所である⁽¹⁷⁾。また、その原語がガンダーラ語であったということも、必ずしもガンダーラのみを指向するものではない。カシユミールや東トルキスタンを含む広い地域でこの言語が確認されているからである。

ところで、現存『中阿含』の訳出者が僧伽提婆であったとすると、その原本は僧伽羅叉が招来、或は暗誦していた可能性が濃⁽¹⁸⁾。『高僧伝』に次のような記事がある。

時西域沙門僧伽羅叉、善誦四含。珣請出中阿含經。
(大正五〇、三六一頁b二四以下)

一方、僧伽提婆、僧伽羅叉はいずれも罽賓の出身と伝えられている。では、罽賓はどこを指すのであろうか。かつて、白鳥庫吉博士が論じた所によると、前漢より晋初にかけてはガンダーラ、南北朝時代はカシユミール、隋唐はカーピシーをさして罽賓といわれていた。しかし、近年、L. Petch, E.G. Pulleyblank, 桑山正進氏らの研究が発表され、白鳥説が修正されてきた。とりわけ、桑山氏は、まず、隋代の罽賓は、カーピシーではなく、カシユミールを指すことを明らかにし、⁽²³⁾ ついで、四世紀から五世紀にかけてはガンダーラを指していたと論述された⁽²⁴⁾。

しかし、四―五世紀にもカシユミールを罽賓と呼んでいた証拠がある。漢訳仏典中の罽賓にあたる Skt. や Pāli の対応を調べると、三〇六年訳の『阿育王伝』⁽²⁵⁾ 以来、三三八年訳の『鞞婆沙論』、東晋代失訳の『那先比丘經』⁽²⁶⁾、四二五―四二七年訳の『阿毘曇毘婆沙論』と一貫して、Kāsmira (Kāsmira, Kasmira) を「罽賓」と訳(音

写?)している。さらに、四八八年訳の『善見律毘婆沙』⁽²⁷⁾は、Kāsmira-gandhāra-rāṭha に対応する箇所「罽賓提陀羅陀國」とある。ガンダーラと區別してカシユミールを「罽賓」と訳しているのである。

以上の事実から、僧伽提婆や僧伽羅叉の出身地はカシユミール(ガンダーラも包含する広い意味でのカシユミール)であったと見るべきであろう。したがって、『中阿含』の原本もカシユミールから招来、もしくは暗誦されてきた可能性が高い。すると、この原本はカシユミールで伝承されていたものとなる。事実、『中阿含』の中には、カシユミール有部のみに限定されるような教理が見出される⁽²¹⁾。

帰属部派⁽³²⁾

『中阿含』の帰属部派に関しては、まず説一切有部系であることは確実である⁽³³⁾。また、説一切有部系内部の位置としては、以前に論じたように、根本説一切有部や東トルキスタン有部と異なり、韻文などに古来よりの伝承をよく保つ説一切有部系の教団に伝承されていたたる

う。ただし、従来の研究では、説一切有部の根本教理である三世実有説が『中阿含』の中に確認されたわけではなかった。そこで、『中阿含』の中に、後代、三世実有説の経証とされる文句が含まれることを指摘しておく。『中阿含』の「長寿王品」の第一経である「長寿王本起經」の中に次のような経文がある。

若世中無是、我可見可知彼耶。(大正一、五三六頁、二七以下)

これに相当する経文が Abhidharmakośabhāṣya (= Akh) の中で「三世実有説の経証として引用されている。yat taḥ loke nāsti tad ahaṃ jñāyāmi vā draṅś-yāmi vā nedam sīhanam vidyate (Akh, ed. P. Pradhan, 1967年版, p. 300, 12f.)

この部分のみでは対応関係はいまひとつ定かでないが、後代、Samathadeva が Akh の注釈に際して、この前後の経文を引用しており、⁽³⁴⁾ 明らかにそれは「長寿王本起經」に相当する⁽³⁵⁾。ただし、Samathadeva は、この経が「Luṅ rin po, Samādhisamyuktaka の第一

經』と記述している。このうち、Lun rin po は、通常 Dirghāgama (長阿含) をなすと考えられるが、この場合には「長寿王本起經」に相当する経名を本来指していたと推定される。 Samādhisamyuktaka が Dirghāgama の一部であるという記事はこれ以外には報告されておらず、逆に、根本有部律の梵本に次のような記事が見出されるからである。

Dirghasūtram Madhyamāgama Samādhisamyuktake (Mūlasarvāstivāda Vinaya Kōśambakavastu, ed. N. Dutt, p. 182, 8f.)

この Dirghasūtra と名付けられている経は、この記事の前後に引用されているその経文から判断して、「長寿王本起經」に相当する。したがって、Dirghasūtra という経名が伝承の過程で誤解をね Luñ rin po とチンツト訳されたと思われる。ゆえに Akhn の引用文は、Madhyamāgama (中阿含) に含まれていたものであり、それは、前に掲げた『中阿含』の経文に相当すると考えようであろう。このように、『中阿含』の中で、三世美

有説の經証が含まれているという事実は、この經典が説一切有部に属していたことを物語る一資料とならう。

組織

『中阿含』の組織については前田憲学博士の研究があるが、根本有部律に引用される、根本説一切有部の Madhyamāgama の組織を比較すると次のような対応関係が想定される。

- 『中阿含』 根本有部の Madhyamāgama
- 六 王相応品 Rājasaṃyuktanipāta⁽⁸²⁾
- 七 長寿王品 Samādhisamyuktaka
- 九 因品 (*[Kāyasmṛtyupasthāna] paryāya-vyākhyāna II)⁽⁸³⁾
- 一一 大品 Saṅgītanipāta⁽⁸⁴⁾
- 一二 梵志品 Brāhmaṇanipāta⁽⁸⁵⁾

二、『雜阿含』

漢 訳

『雜阿含』は、四三五一四四三年に中インド出身の求那

跋陀羅が翻訳した。ところが、現存の『雜阿含』は、訳出後、調卷の乱れをきたしている上に、卷二三と卷二五が消失し、代わって『無憂王經』がその場所に混入している。しかし、この消失部は『瑜伽師地論』の「撰事分」において論説されており、内容もある程度推察することができる⁽⁴²⁾。

成立地・伝承地

『雜阿含』の原本は、招来者、出所のいずれも確かなこととはわからないが、スリランカより招来されたという説もある⁽⁴³⁾。

しかし、『雜阿含』の成立にあたっては、マトゥラーの教団が関与しているようである。門川徹真氏が論述されているように、『雜阿含』には、マトゥラー有部の正統性を主張するかのようになり、ブッダがマトゥラーで説法を行なったという短経が二經見出される。この二經に対応する Pāli 經典では、一方は舍衛城⁽⁴⁴⁾、他方は Vajji 國の Ukkacela⁽⁴⁵⁾ において説法がなされたことになっている。『雜阿含』以外の漢訳三阿含や Pāli 經典を通じて、

ブッダがマトゥラーで説法したという記述はないようであり、したがって、『雜阿含』においてのみ、説法地の伝承が改作されたと考えられる。改作の理由としては、この二短経の内容が、「自らを依り所とし、法を依り所とせよ」という、有名なブッダの遺訓であったためと推定できる。したがって、『雜阿含』の成立に当たっては、マトゥラーが重要な役割を果たしたと考えられるのである。

なお、Pāli 伝においては、五つの過失があるからという理由で入城していないマトゥラーに、根本有部律の対応箇所⁽⁴⁶⁾においては、ブッダは神通力をもって入城し、教化を行なっている。また、後述するように、『雜阿含』は根本説一切有部系の伝承と見られる。したがって、以上の諸事実は、根本説一切有部がマトゥラーと密接な関係にあったことを示す資料と言ふべきかもしれない⁽⁴⁷⁾。

帰属部派

『雜阿含』の帰属部派としては根本説一切有部系である可能性が極めて高いことは、以前に論じたことがあり⁽⁴⁸⁾、

また、同じ結論の研究も発表されている⁽⁵²⁾。

もっとも、「根本説一切有部」という部派名は七世紀後半にインドに旅した義浄の報告が記録に現れる最初であろう。その直前の七世紀前半にインドに出かけた玄奘は、根本説一切有部には何ら言及していない。しかし、玄奘訳の有部系論書に引用されている経文には根本説一切有部特有の伝承が認められるのである⁽⁵³⁾。しかも、四世紀に比定される東トルキスタン写本にすでに根本説一切有部特有の伝承が見出される⁽⁵⁴⁾。したがって、根本説一切有部が成立していたか否かはさておき⁽⁵⁵⁾、根本説一切有部律に認められる、この部派特有の伝承そのものは、すでに四世紀にはある程度形成されていたと見てよい。ゆえに、この特有な伝承を根本説一切有部系の伝承と呼び、この伝承を保持した教団を根本説一切有部系と名付けることは便宜上差し支えないのではなからうか。『雜阿含』の場合も、根本説一切有部独自の改作らしい、この部派に特有な伝承に満ちており、根本説一切有部系に帰属していたと考えておく⁽⁵⁶⁾。

組 織

前に述べたように、『雜阿含』は、訳出後、混乱や欠損を被っているため、その組織は復元する必要がある⁽⁵⁷⁾。この場合、帰属部派がほぼ同一と思われる根本有部律の記事が参考になる。ここでは、推定できる原組織と Pali の Samyuttanikāya の組織を対照してみよう。

- | | |
|--------------------------|--------------------|
| 『雜阿含』 | Samyuttanikāya |
| (1) 蘊品 | [3] Khandhavagga |
| (2) 六入処品 | [4] Saḍḍātanavagga |
| (3) 因品 | [2] Nidānavagga |
| (4) 弟子所説品 | |
| (5) 道品(Mārgavargaṇipāṭa) | [5] Mahāvagga |
| (6) 僧耆多品(*Saṅgīta) | [1] Saḅbhatavagga |

以上の中で、(2)、(3)、(4)、(5)(道品)は『雜阿含』自身の中にその名称が現れる。(5)の Mārgavargaṇipāṭa は根本有部律の梵文にこの記事があり⁽⁵⁸⁾、(1)の「蘊品」は根本有部律の漢訳に見える名称である。(6)の「僧耆多(*Saṅgīta)」は『雜阿含』自身の中にその一短経が引用

され、この名称が付されている⁽⁶⁰⁾。根本有部律には、これら以外に「仏語品(仏品)」という品名も現れるが、この扱いは保留したい。

引 用

直前に触れたように、「僧耆多品」は、『雜阿含』の「弟子所説品」の中にその一経が引用され、解説されている。これ以外にも、「波羅延(Parāyana)」、「義品(Arthavargiya)」という名称を付して、その偈頌が引用された。Udāna の偈頌も「世尊が説いた偈」として引用されている⁽⁶¹⁾。Pali 三蔵では Dighanikāya に収められている「帝釈窟説法」の一部も二度引用される⁽⁶²⁾。これらの引用状況は、「帝釈窟説法」のうちの一例を除けば、対応する南方上座部の Pali 經典でも確認される。したがって、それらは、上座部内の枝末分裂が起こる以前の段階に生じた引用と見られる。ゆえに、この段階の伝承を「原 Samyuktāgama」と呼ぶと、その成立は *Saṅgīta, Parāyana, Arthavargiya, Udāna, 「帝釈窟説法」が一応成立する時期以後に想定しなければなら

らないであろう。

他方、『雜阿含』中の諸短経の中には、後世の付加ではないかと疑われるものがあるが、その中には、後代、著名な論書に経証として引用され、仏教思想上重要な役割を果たすものもある。たとえば、一一七七経は、「菩薩摩訶薩」という大乘仏教的用語を含み、また、後代、「灰河経」という名で Mahāvāsanuśāntakāra の世親釈などに経証として引用される⁽⁶³⁾。さらに、『雜阿含』巻五十には、Pali 經典や『別訳雜阿含』に対応するものがない短経が含まれるが、その中の一三五六経は Akkha. p. 314 などに引用されている。以上が新たに指摘できる。

三、『別訳雜阿含経』『増一阿含経』『長阿含経』

『別訳雜阿含』は、訳者不明であり、訳出時も西秦時代(三八五—四三二年)と推定されているにすぎない⁽⁶⁴⁾。帰属部派としては、従来、法蔵部または化地部に帰属していたと考えられていた⁽⁶⁵⁾。しかし、この經典とほぼ同

時代に訳出され、したがって原本もほぼ同時代のものと考えられる法蔵部や化地部の律蔵との対応部分を比較すると、細部はいずれとも一致しない。このうち、法蔵部所伝の『四分律』との比較検討の結果は以前に報告したので、ここでは、化地部所伝の『五分律』とも伝承を異にすることを示しておく。

根本有部律

naksatrāṅgān mukhaṇi candra śādityas
tapatān mukham /
urdhvaṇ tiryag adhaś cāpi yāvati
jagato gatiḥ /
sadevakeṣu lokeṣu sambuddho hiṣya-
tān varatḥ //
(Saṅghabhedavastu, ed. R. Gnoli, pt.
2, p. 29)

『別訳雑阿含』 星辰諸宿中 月光名為最 於衆明之中
日光最為最 上下及四方 世間及天人
諸賢聖衆中 仏最第一尊(大正二、三九一
頁b)

『五分律』 一切照明中 日月光為最 天上天下中

短少經を合成し、それに大乘仏教の要素を加えたようなものがある。⁽⁷⁶⁾

『長阿含經』

『長阿含』は、四二二—四一三年に、罽賓出身の仏陀耶舎と竺仏念によって訳出された。その原本は、ガンダーリー語で伝えられ、⁽⁷⁷⁾法蔵部に属していたと考えられている。⁽⁷⁸⁾

近年、E. Waldschmidt 教授は、法蔵部の Dirghama (長阿含)と教授が推定する Skt. 写本を公表した。⁽⁷⁹⁾ 教授の推定が正しければ、『長阿含』の原本と同系統の Skt. 写本となるが、細部を検討すると必ずしも『長阿含』と一致するわけではない。とりわけ、この写本に説かれる十二分教の配列は、『長阿含』や『四分律』に共通する法蔵部伝とは異なり、『雑阿含』などに見られるものと一致する。

結 び

以上の所論を要約して結びにかえたい。まず、『中阿

仏福田為最(大正二二、二頁b)

大字部に着目すると、『別訳雑阿含』は根本有部律と一致し、『五分律』はそれらより簡潔な伝承を残している。⁽⁸²⁾

しかも、以前に論じたが、『別訳雑阿含』は、ここ以外でも根本説一切有部伝(特にその古い伝承)に特有な伝承を多々示す。さらに、その細部の組織である經の配列が『雑阿含』とほとんど一致することが注目される。したがって、『別訳雑阿含』は根本説一切有部に極めて近い部派に属していたと見るべきであろう。

『増一阿含經』

『増一阿含』の漢訳者については、前に『中阿含』の項で論じたような次第で、僧伽提婆訳と考えてよいだろう。成立地としては北インド、とりわけカシュミールの可能性が強い⁽⁸⁴⁾という以外は不明であり、帰属部派も、幾多の考究にもかかわらず、⁽⁸⁵⁾まだもって不明である。ただ、『増一阿含』内部の各短經の中には、いくつかの既成の

『含』は、僧伽提婆の訳出であり、その原本はカシュミールにおいてガンダーリー語で伝えられていた。帰属部派は、説一切有部内の比較的古い伝承を保つ教団であり、有部伝である点は三世実有説の経証を含むことから確認できる。

『雑阿含』は訳出後に伝承が大幅に乱れ、欠損も生じたが、その原組織は、根本有部律や『瑜伽論』の撰事分によってかなり復元できる。その原本の成立にあたってはマトウラーの教団が関与しており、帰属部派も根本説一切有部系と見られる。『雑阿含』の中には、他經典ならびに *Sāṅgīta の引用が認められるが、それらは古く上座部内部の枝末分裂以前に遡る。したがって、その段階の原 Saṃyuktāgama は、それらの引用經典の成立以後に形成されたと考えられる。

『別訳雑阿含』は、法蔵部や化地部に帰属する律文献中の対応部と伝承を異にしており、むしろ、根本説一切有部伝に近い。

『増一阿含』は、訳出者が僧伽提婆と推定でき、原本は北インドで成立したようであるが、既成の短經から合成

なれたような部分も含む。

『長阿含』は、原本がガンダーリー語で伝えられ、法藏部に帰属するが、東トルキスタンで発見された同系統の Skt. テキストとは若干、伝承を異にする。

註

(1) 本稿では、根本説一切有部が説一切有部系の中に含めよう考える。ただし、J.W. de Jong 教授は、根本説一切有部には、本来、経藏はなく、後に説一切有部の経藏を採り入れたと推定される。

“Les *Sūtrapiṭaka* des *Sarvāstivādin* et des *Mūlīasarvāstivādin*,” *Mélanges d’indianisme à la mémoire de Louis Renou*, Paris 1968, pp. 395—402.

根本説一切有部の位置については、静谷正雄『小乗仏教史の研究』百華海、昭和三十三年、一五三—一五八頁参照。

(2) 説一切有部系の阿含経典は、葉田國成博士の *Ksudraka-āgama* を存在したことは、Akhh p. 466 以下に引用されることなどから確認される。また Akhh 以下引用される *Ksudraka-āgama* は *Parāyana* の一部のこと。Samathadeva の Akhh への注釈にも引用文の前後に紹介されているが、それは東トルキスタン出土の *Parāyana* の断片に限定するものとされる。

Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland X, Sanskrithandschriften aus den Turfan-funden IV, eds. L. Sander and E. Waldschmidt, Wiesbaden 1980, p. 237 f. 又『北京版西蔵大蔵経』vol. 118, Thu 128 b 4—129 b 7 を比較された。邦訳は、本庄良文「シヤンタデーウマの伝へる阿含資料」(『佛教研究』一三、昭和五八年)五九—六一頁参照。

(3) 「増一阿含経解題」(『国訳一切経阿含部』八、大東出版社、昭和四四年改訂版、四二—八頁以下)。

(4) 大正五五、九九頁。

(5) 『漢訳中阿含』増一阿含の訳出について(『大倉山学説叢書』二、昭和三年)八八—九〇頁、水野前掲論文四二—六頁。

(6) 大正二一、八〇六頁。

(7) 大正一、五一—頁、六八五頁。

(8) O. von Hinüber: “Upāli’s Verses in the *Majjhimanikāya* and the *Madhyamāgama*,” *Indological and Buddhist Studies, Volume in Honour of Professor J.W. de Jong on his Sixtieth Birthday*, eds. L.A. Hercus et al., Canberra 1982, pp. 243—251; “*Sanskrit und Gāndhāri in Zentralasien*,” *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*, eds. K. Rührborn and W. Veenker, Wiesbaden 1983, pp. 27—34.

(9) S. Konow: *Kharoṣṭhi Inscriptions with the excep-*

tion of those of Aśoka, Calcutta 1929, pp. xcv, 156.

(10) H.W. Bailey 教授と J. Brough 教授による従来の研究ではこの点の考慮が行き届いていないように見える。たゞせば、『長阿含』の音字語にガンダーリー語の反映が見られることは、その中の『中阿含』等の既存経典の音字語を踏襲しつつも、可能性のあるものを採りつつも、「風雅」(註(4))の Brough 論文に引く。

(11) Cf. J. Brough: *The Gandhāri Dharmapada*, London 1962, p. 94. 各符 *thi>sa* などについては *bodhi->bosa*. (H.W. Bailey: “*Gāndhāri*,” *BSOAS* 11, 1946, p. 777) 以下行例を参照する必要がある。『長阿含』には「彌私羅」(大正一、一四九頁)と音字を記す例は、ガンダーリー語を反映しつつも、

(12) Cf. Brough, op. cit., p. 103; T. Burrow: *The Language of the Kharoṣṭhi Documents from Chinese Turkestan*, Cambridge 1937, p. 21.

(13) Cf. Brough, op. cit., p. 86.

(14) J. Brough: “Comments on Third-century Shanshan and the History of Buddhism,” *BSOAS* 28, 1965, p. 610 註 Skt. *Bāṣpa* は『中阿含』には「毘提」を指す *piṭṭha* であり、Pkt. 派の *Vappa* の区別がある。したがって *spa>pha* は *Gāndhāri Dharmapada* (ed. J. Brough) 81 以下の論議を記す *pa* の *Vappa* による

形がガンダーリー語になかったとは言えず。

(15) もともと、翻訳者の唱え方が原本の原語通りでなかったとすれば、問題は複雑になる。

(16) 「中阿含経解題」(『国訳一切経阿含部』六、昭和四四年改訂版)四〇九頁。

(17) “Zu den Rezensionen des *Udānavarga*,” *WZK* SO 14, 1970, pp. 47—124.

(18) 水野前掲論文(註(9))、四九頁参照。もともと、曼藤難提が招来した原本を備伽提婆はただ改訂したにと考えたことの可能性もある。

(19) この「種」は音讀もしくは、自ら招来した原本の読誦を指すものではない。阿含の *ga* は『雜阿含』や『長阿含』は、また中国には招来されつつもなかつたと思われる。

(20) 『藏書国書』(『中華書局全集』六、岩波書店、昭和四五年)二六五—三三九頁、『東洋学報』七一、大正六年(初田)。

(21) *Northern India according to the Shu-ching-chiu*, Roma 1950, pp. 63—80.

(22) “The Consonantal System of Old Chinese,” *Asia Major* 9, 1962, p. 218 f.

(23) “*Khair Khaneh and its Chinese Evidence*,” *Oriens* 11, 1975, p. 101.

(24) 『藏書国書』(『風俗』マシマの考古学—樋口隆康教

- 授遺官記念論集、新潮社、昭和五八年、五九八—六〇七頁。
- (25) 大正五〇' 一〇五頁 a' Divyāvadāna, eds. E. B. Cowell and R. A. Neil, p. 399.
- (26) 大正二八' 四三四頁 a 乃至。大正二七' 二五四頁 b 参照。
- (27) 大正三三' 廿〇二頁 a' Milindapañha (PTS 版) p. 82.
- (28) 大正二八' 一九八頁 a 乃至。註(26) の出典参照。
- (29) Samantapāsādikā (PTS 版) vol. I p. 64.
- (30) 大正二四' 六八四頁。
- (31) 伴昇空「漢訳雜阿含經」『印仏研』三〇—二' 昭和五七年、三四七—三五〇頁。
- (32) 帰属部派を考察する際の留意点について次の論文は示唆に富む。H. Bechert: "Buddha-Feld und Verdens-tübertragung..." Académie Royal de Belgique, *Bulletin de la classe des lettres et des sciences morales et politiques*, 5e série, vol. 62, 1976, pp. 27—51.
- (33) 赤沼智善『佛教経典史論』法蔵館、昭和五六年復刻(昭和一四年初版)の四一頁以下。なお、von Hinüber 教授は、前掲論文(註30)において、原本がガンダーリ一語であった点から、『中阿含』の法蔵部所伝の可能性を示された。しかし、ガンダーリ一語であるからといって法蔵部所伝とは限らなく、諸一切有部系の Udānavarga

- の冒頭部にはガンダーリ一語版の刻文資料も存在し(Schmithausen, op. cit., p. 77)『浄土経典』にもガンダーリ一語の反映が認められる[Brough, op. cit. (註17) p. 609f.]からである。
- (34) 拙稿「Udānavarga 諸本と雜阿含経、別訳雜阿含経、中阿含経の部派帰属」『印仏研』二八—二' 昭和五五年、九三—一九三頁。
- (35) 宋元明三本の「道」を「是」に読む。
- (36) 北京版 No. 5595, Thu 19 b 8—20 b 3. 本庄良文「三世実有説と有部阿含」『佛教研究』二二' 昭和五七年、五七一—五九頁参照。
- (37) 『原始佛教聖典の成立史研究』山喜房仏書林、昭和三年、六三—七—六四八頁。
- (38) Cf. E. Waldschmidt: "Central Asian Sūtra Fragments and their Relation to the Chinese Āgamas," *Die Sprache der ältesten buddhistischen Überlieferung*, ed. H. Bechert, Göttingen 1980, p. 142.
- (39) Samathadeva の記事による推定した。Samathadeva が「Paryāya-vyākhyāna の第二撰掲の第一経」と呼ぶものが『中阿含』の因品第一経に相応し「校部建」シヤマターマの俱舍論註について『印仏研』四—二' 昭和三年(一九一六頁)「Kāya-smṛtyupasthāna-paryāya-vyākhyāna の第二撰掲の第九経」と呼ぶ(本庄良文「Samathadeva の俱舍論註—根拠(三)」『印仏研』二

- 九—二' 昭和五六年、九二—二頁]ものが因品第九経に相応する。
- (40) 次のように対応する。
- 大品 Sanghānīpāta
摩波経 (No. 122) Posadhastira (Posadhasthāpan-avastu ed. N. Dutt, p. 107)
商人求財経 (No. 136) 藥叉経(業事) 大正二四' 六九頁 a)
- (41) Cf. Waldschmidt, loc. cit. (註33)
- (42) 呂澂「雜阿含経判定記」(『内学』一' 一九二四年、一〇四—一二五頁)が論証した。なお、拙稿「説一切有部系アマガの展開」(『印仏研』三三—二所収)も参照。
- (43) J.W. de Jong: "Fa-hsien and Buddhist Texts in Ceylon," *JPTS* 9, 1981, pp. 105—115.
- (44) 門川徹真・宇野順治「八相彫刻と経典の関係」(『印仏研』二二—一' 昭和四八年、四四七—四六〇頁)。
- (45) Nos. 36, 639.
- (46) Samyuttantikāya (= SN) XXII. 43.
- (47) SN XLVII. 14.
- (48) Ahgutaranikāya V. 220; Manorathapūraṇī (PTS 版) vol. III, p. 329.
- (49) Bhaṣajyavastu (ed. N. Dutt) p. 17.
- (50) 静谷、前掲書、一五六頁参照。
- (51) 榎本、前掲論文(註34)。

- (52) 伴昇、前掲論文。
- (53) Schmithausen, op. cit., pp. 104—107.
- (54) Schmithausen, op. cit., p. 111f.
- (55) 静谷、前掲書、一五四—一五六頁は、三〇六年訳の『阿育王伝』が、付法相承に関して根本有部律に近いことを指摘し、西紀四〇〇年頃、マナーラーを中心として根本有部が成立したと推定する。
- (56) ただし、『根本説一切有部毘奈耶雜事』に見られる十二分教の配列は『雜阿含』に見られるものと異なる。平川彰『初期大乘仏教の研究』春秋社、昭和四三年、七三—三頁以下参照。
- (57) 諸学者の復元案については、伴昇昇空「梵文断簡 Nidānasamyukta」(『大谷学報』五九—一' 昭和五四年)六〇頁に表示されているが、他に呂澂氏(前掲論文)に於けるものもある。
- (58) Bhaṣajyavastu, p. 19.
- (59) 大正二四' 四〇七頁 a。
- (60) 大正二二' 一四三頁 a。よなみだ、Pali の Dighanikāya の Sanghīsuttanta に相対する東アムキマタン出土の Silt. ナキストは "Sanghīsūtra" と題されておる。ナキスト自身(ed. V. Staeche-Rosen, p. 206)は、"Sanghīta" とあり、『五分律』(大正二二' 一九一頁 a)や『四分律』(大正二二' 九六八頁 a)にも「僧祇陀」という記事が

- あるからである。榎本、前掲論文(註34)も参照。
- (61) 大正二四、四二三頁a。
- (62) 大正二四、四〇七頁b。ただし、チベット訳(北京版、No. 297 a 2 f.)では「仏語品」。
- (63) 石上善応「初期仏教における説論の意味と説論經典について」、『三康文化研究所年報』二、昭和四三年)八六頁にこの引用箇所の一覧表がある。
- (64) 大正二、一四九頁bならびに、SN (PTS 版) vol. IV, p. 292 に Udāna 7. 5 中の偈が引用されている。
- (65) 大正二、一四四頁c、二五七頁b。なお、宇井伯寿『印度哲学研究』二、岩波書店、昭和四〇年復刻(大正二二年初版)、一六四頁参照。
- (66) 後者、すなわち大正二、二五七頁b。
- (67) 三枝充應「概説—ボサツ、ノラツシ」、『講座・大乘仏教』一、春秋社、昭和五六年)九八頁、早島理「Dharm-anidhyānakasānu」(『印仏研』三一一、昭和五七年、四二四—四二七頁)参照。
- (68) 本庄良文「シヤマタデーヴァの俱舍論註「隨眠品」」(『南都仏教』四九、昭和五七年)三七頁参照。
- (69) 水野弘元「別訳雜阿含經について」(『印仏研』一八一、昭和四五年、四一—五一頁)。
- (70) 水野、前掲論文(註69)。
- (71) 榎本、前掲論文(註34)。
- (72) これ以外に、『別訳雜阿含』三七四頁c、四四〇頁b—四四一頁aと『五分律』一八頁b、二六六—二六七頁との対応でも同様。
- (73) 榎本、前掲論文(註34)。
- (74) Cf. 松本文三郎『佛典の研究』西午出版社、大正三年、三五二—三五四頁、J. Przyluski: "Le Parinirvāna et les funérailles du Buddha," JA XIe Sér., 12, 1918, p. 435; La légende de l'empereur Asoka, Paris 1923, pp. 206, 212; P. Demiéville: "La Yogācārabhūmi de Saṅgharakṣa," BEFEO 44, 1954, p. 375.
- (75) 最近の研究としては、静谷正雄「漢訳『增一阿含經』の所屬部派」(『印仏研』三一一、昭和四八年、五四—五九頁)がある。
- (76) E. Lamotte: "Un sūtra composite de l'Ekottara-gama," BSOAS 30, 1967, pp. 105—116.
- (77) Bailey, op. cit., pp. 764—797.
- (78) この点に関する諸研究については、前田、前掲書(註36)、六三五頁、註(3)を参照されたい。
- (79) Drei Fragmente buddhistischer Sūtras aus den Turfanhandschriften, NAWG I, Phil.-hist. Kl. Jg. 1968 Nr. 1, pp. 3—16.

(注のついで) ちみち・華頂短期大学講師)